

安藝の早苗抄録

熊代繁里著

安藝の早苗抄録

# 安藝の早苗

この旅衣はこそその春思ひ立侍りし さはることありて之物し侍らざりける  
を ことし天保十年あまりひとせといふ(天保十一年・一八四〇年)三月の末つ方  
より思ひおこして卯月にもなりぬれば やがて出たへく思ひしを一日二日と  
えさしあへぬるいてきて やうく今日なん出立ける 岡崎杳樹おのれさて  
ハとも男ふたりとなり

四月十五日天氣よし 家を出つとて ちゝはゝも妹もまなこも まさきくて  
かくしあひみんおもかはりせず

よべ杳樹とゝもに ときはその翁(山内繁憲の父 繁樹)の許へよゐりてあすなん  
かくと告げるに出立つ折翁のもとより

神のますよつ山の名を忘れすは ぬさとりむけて早かへりませ  
とよみて玉ひけるかへし

さしてゆくかたにありてふまつ止の まつとしきかば早かへりこん  
人々多く送りにとて南部川の川へまで来たり 山内繁憲山崎繁平二人は片倉  
峠まで送り来ぬ 別るとて

今日よりはそのかたくらと眺めつゝ しのびやせまし君のおもかけ  
岩代をすぎて橋ヶ谷山羽何がしの許に立ちよりて 中山といふを越え 切目  
川を渡れば王子の社あり こは新古今集にもこの社の事ともありて旧社なり

印南の里にて昼けたうべて　それより津井楠井上野ゝ嶋塩屋などをへて日  
高川につく　此比雨降つゝきてみずかさいと高し　さてはたりてやゝゆくに  
道のほとりに家あり　主し心ある人と見えて　あたりの溝に杜若いと多くう  
ゑたるが　今を盛りの色いとなつかし　志ばし見居りて

所せて花さきみちてはるなつの　へだてもしらぬかきつばたかな

今は御坊の町のつゞきなれど、以前町を遠くはなれて紀小竹と云う処に、孫三郎と云う小門構えの大なる家あり、その前を用水溝が流れてかきつばたを植えてあり、われ子供の時も猶植えありしと覺ゆる。この家今の岡崎医院なり(芝口識)。

大方この比の物　ならの古より春の暮　山吹つゝじ杯と同じやうによみけれ  
ば　かくよめるになん　日高の野を行くほど足いたくてこまれど　ねんして  
ゆき過るにいと難かしければ　まだ日かけはいと高けれど原谷につきて岩の  
谷といふ所にやとる　此家八道の門くりにて谷川にかたつきてつくりかけた  
り　暁ちかくねざめしてきくに　谷川の音をかしく聞えければ　西表のつま  
戸開きみるに月あかし

谷川やうつろふ月のかけ更て　ねさめさひしき水の音かな  
人々もねさめして何くれとかたる

十六日天氣よし　つとめてこのやどを立いて、　し、せの山路にかゝりて  
し、のせの山をかしこみあへきつゝ、　登りしくれば　あしつまづくも

姿の梢に咲かゝりたる藤波の花　いと面白く匂ひたり

し、のせの山の藤波立クへる　われ待つつけにちりてすなゆめ

このはたり卯の花いと多し　峠にいたりて茶店のはしため端女に時鳥は鳴つやと  
とふに　朝毎に鳴よし答へければ　しはしやすらひて　もしやとまでど鳴さ

りければ

朝ことにきくとはきけど時鳥 なかぬはつねはきくよしもなし

坂を下るに道いとけはし 麓は河瀬村ゴウセ（今はゴノセといふなり）井関の里も過て  
とも男のいふにまかせて 本街道はゆかで水尻越といふ方へぞまはるこ  
の道は糸我山の東の麓をめくりて有田川のわたり場より十四五丁ばかり東の  
つゝみに出る道なり 殿村とかいふ里よりそいる二つの坂をこゆることをい  
とひてなり 有田川水かさいと高し わたりて宮原の里 こゝにていひくひ  
しばしやすらひて 駕にのり小原越といふ方へかゝる こも供の男のまばか  
りにて かぶら坂藤白峠をこえんよりはとてなり 小原坂にかゝるこの道い  
とくけはしくてかちならましかは いかにかくいまして思ふまゝ、  
夏引のをはらの坂はさかしけれ かちぢならねハくるしともなし  
この坂の峠よりみ渡すに あはの遠山淡路しまの見るめいと面白し  
はるくくと小原の手向こえくれば まちかくなりぬあはの遠山  
小原の里濱中の里も行すぎて やうく塩津坂にかゝる程

つらくに小原濱中行過て しほつの里も近づきにけり

こゝにて駕よりおりて又舟にのる 申の時さがりわかの浦につきて

あまのすむ塩津をいで、若の浦の清き渚に舟はてにけり

この渡りハ三里なるが 今日波高かりをからうじてことなく渡りえしこと  
を人よろこふ 若の里より酉の時はかり若山三木町何某がもとにやどるこ  
ゝまでは南部より十七里の道なり

十七日天氣よし つとめてさかやきなどして東照宮のみまつり拜み申とて  
辰の時ばかりかじ橋のつめより舟にては（和歌川）かべはを下る 此間よものけしき云  
はん方なくをかしかり つれと酒のむとて雑談のみにて哥はえよまずなん  
巳の時過て玉津嶋の江に舟つきければ こゝよりおりてさづき求めて御祭を  
拜むに にぎはしき事いふも更なり いと尊くかつはおもしろき物から人の  
声物の音かしましくてなん多くかくよめる

大君のみことかしこみ 天（夫）の下まをし玉へる神そたふとき

みあそひのかねにつゞみにふく笛に こゑ打そふるはかの浦波

かくてつきくゝに物み人をて 未時さがりて舟にかへる 比はたりしほひて  
漕出べくもあらねば 人々陸におりゐて殿人たちのかへりの行列なとみる  
申の時過る比（毎）やうく舟をこきい多（毎）しで日くれて旅居にかへれり 柄知れる  
人一人二人は多（毎）南部の人 けふの御祭をがみにとてこし人もとふらひ来れり  
主しわか里しらす 殿の君の北の方の御輿の行列かきたるを描きて あす  
の様子はかくくゝと語る 比御輿入はかねて承り置たる事なればいと心ゆか  
しくなん

十八日天氣よし ことなくつきたる由書して南部へといひやる かべの南部  
人又来りて軽く語らふ 夫よりこゝかしこうからはししるべの家とふらひて  
午時より柿園（加納諸平翁）にいたり何くれとミし方の物かたり哥かたりなどす  
今日のはかの御入輿の行列見んとて心いられければ やかて立いて、かへる  
藤垣内翁（本居内遠）の許に行きてや、語くふ程 旅居より人して御入輿の行

列過はく<sup>ママ?</sup>よし 云ひおこせければ立いて、本町の方をさしてゆくに 人あ  
また立こみてまほにはみるべくもなし 本意ならねど京橋の上を過る程たに  
とて川の人近く立いて、見るに 橋の上も右左のをばしまの きはに人あま  
た並立て こゝもさやかには見えねとせん かたなくたゞ鑑又は騎馬の人の  
ゆくを見やりつゝ、よべの次第のきゝにるを思ひいて、かれこれとおしう  
かゝふ程なくすみれば旅居にかへる 申の時ばかりよりかくなる教應寺に  
至る 酒くだ物など出してもてなす やゝ更る比ほひ 雨すこしふりぬるよ  
し こは十九日の朝奈樹にきゝしなり

十九日 つとめては空打くもりてよべの雨のなこり尚見えけるに 辰の時は  
かよりさやかにはれて日よし 巳の時より柿園に至りて 例のかたるほど山  
羽迄孝ぬし来あひければともにかたる 未の時かへりて小浦廣名ぬしのもと  
をとふに しはしありて高橋博鞆きあひたり 酒くだものなどいたして哥よ  
む 尚<sup>當つ</sup>坐題

残 花

みつえさす岡辺の木々のはかくれに 残るも尊き花の色かな  
夏山の青葉にまじるくれないの うす花ざくらいろぞかくれぬ  
高野山夏の朝かせ猶さえて 木の間にのこる花のしら雪

蛩

雨くらき入江のあしのはがくれに くつろふ星はほたる也けり  
ふきわたるをだえのはしの夕風に 玉とみだれてとぶ蛩かな

新樹

ああすみしかきほの柳春すきて　いふせき辻にしげる比かな  
や、かたらひて戌の時はかり　旅居にかへりぬ

二十日天氣よし　午の時より柿園にいたる　例の哥語りす　未の時さかりよ  
り藤垣内に至りてこゝにても例の如く語る　永年主にはじめてあひて故大平  
大人の事どもとりいて、かたる　はしに金比羅殿島出雲大社などにまうづ  
る道々とひなどするに　翁國々の画圖とりいて、道筋のことゞも云うふ　酉  
の時旅居にかへるに　あるじ酒肴とりかへてもてなす

廿一日天氣よし　今日は大納言の君の御入府物みにとて　辰の時計りより坂  
本や何がしの家にゆく　こはおのかろかくにて昨日よりかねて言ひおこせ坐  
ければ人々と共にゆく　酒肴出してもてなす　相知れる三名三名部人二人三  
人きあひて共に酒のみ物かたりなどす　けふハ例の御入府にまかひていと  
そくいらせ玉ひて　やうく、申時下り御さきのみゆ　殿の君御馬上にてよ  
そほひいとおこそかなり　供の面々行列の嚴重なるさま　いひつくしがたし  
物みつゝふしのねの高きみかけをかしこくも天みるごとくあふく今日かな  
通り過ぎ玉ひければ　やがて旅居にかへり　けふかの家にて御入府と待ほ  
と　常盤園翁のもとより文来る　啓きみるに何くれと道々の名所ともしるし  
教へ玉ひてしりに

君乃ゆきけふからせは妹よりも　吾まちかてな早かへりませ  
君のゆくきひにありてふむしあけの　せとのはやしほ早かへりませ



とあり

廿二日日よし つとめておきいて、 何くれと出たつよそひするほと 南部  
人何かし来りてかへす よしいひければ二人の親のもと はた山崎繁平が方  
への文ども忝樹ガ物するうち常盤園翁の許江文かく ついてにかのおこせ給  
へる哥を思ひいて、よみてかきつけゝる

立つての水いくかもあらねと恋しけく 思ほゆらくはたひの常かも  
むしあけのせとのはやしほはや行て はやかへりこんさきくありませ  
かくて辰時はかりこゝをいて、 坂本や何かし藤應寺杯へ此間のよろこひい  
ひにとて立よる 若山をはなれて田井の瀬の渡りを舟にて渡るにけしきいと  
面白し

あなおかしこの川水のとこなめニ きて見まほしき里たりなるか那  
行まゝに山口の里ちかつきぬ 若山よりこゝまで三里とそ 此所にてしはし  
休らひて

ゆくくゝ越ゆかん坂路のろさを思ふにも かねてくるしき山口の里  
程なくをの山の峠に至りて

しけりけりふるし関屋のあとたえて てる日のかけももらぬ計りに  
跡たえしきの関守のたつゞわ 末のよのけて名には立けり

ふもとに下りてや、ゆくに 両国橋とて紀國と和泉の国との境なる細き谷川  
に渡せるはしあり渡りつゝ  
古里をかけてしのべとはしはしらたち さかひてや渡しおきけん

程なく山中の里をも行きすぎつ

し、さるは俣へくもなし旅人の　ゆき、にぎはふ山中の里

信達檜の井安恣なんといふ里も過て佐野市場といふ所を過る程　日もくれる

に　このわたりハよき宿なしいうて貝塚までとてあなかちに物しければ　足

いたくこうじにたれど　夜をこめて急きつ、まて茶屋とかいふはしいりを行

過るほと

家には安いせましをねぬ縄の　くにしてもあるかよをこめて行く

戌時はかり貝塚につく　山口よりこゝまで六里とて

十二日雨はやみたれど空は尚はれくもれり かごにのりて卯の時こゝを立  
 づ 山中の里雄の山も過て山口の宿 こゝにてかごよりおりてゆくてもいは  
 し 卯月にこそこゝを過しなど思ひつゞけてしのぶもあやふし 田井の瀬の  
 わたしをわたりて堤なる茶店にて休らひて 午時さがり若山福町なるやどり  
 につく 信達よりは六里半 さかやしき杯してのち 森岡何かしのもとをと  
 ひ 或家にいたりてやゝかたらひつゝ南部のことゝもとひきゝなどす こゝ  
 をいて、藤垣内に行く 經甄（つとむ）とかいふ人きあひたり やゝありて此人はか  
 へれり 永平ぬし物よりかへりて翁と共に何くれと物かたりせらるゝに お  
 のれも道すがらの事どもかたる この間ともの男をして柿園へつかはす 酉  
 の時藤垣内をいて、柿園へと行くにかの男にあひたり 柿園ぬしけふは物へ  
 行かれたる由いひければ旅居にかへる 湯あみて後書よみなどする内或人來  
 りて 明日は共に南部に物すべきよしひてやゝ語らふ 酒さかな出して共  
 にのむ 夜ふけてかへれり おのれいいぬ  
 十三日空くもる 三名部の商人舟のこゝにきみたりけるクかへるへき由 い  
 ひおこせばよき便なればのりてかるべし しばしまちてよといひおきて 辰  
 時よりいて、或家にゆくに 主人もいてととつよそへハさらば 旅居まで  
 行て待玉へ おのれは立よる所もあなればとてこゝより藤垣内にゆく 大輝  
 式道岩崎精芳きあひたり やゝ語りひて柿園へとゆくにいと待わひたる由い  
 ふ そはよべ人をしてけさとくまるべしといひおきつればなり 道々の事と

も哥がたりとりまじへかたらふ内 酒さかないたして共にくみかはしつゝ、主もさまく語る この間旅居より今一人の供の男舟出すへき由再ひ告来れり

雨又ふりいつ 午時さがるころいとまつげて 教應寺をとふに又酒出すしばくいなみつれとしひてとじめければ やゝ語らふ内舟出すべき由又告来りて そゝのかすまゝこゝを立いつ けふ出 小浦廣名ぬしのもとをもとはまほしかつつれてと舟出いそきけれどえ立よらずなん かの舟子ども待兼ねたる由しばくいふ 或人と共に青岸といふ所に行て舟にのる 一里許こぎ出ぬと思ふに日くれて 雨はげしうふりしければ ふる川とかいふ方に舟をこぎ入れて こゝよりあがりて和哥の里に宿らんとて人々と行くに くらきまゝ道ふみたがへて 坂をこえ山をよぢつゝ才賀崎にいたる やどり求むれどもいづくもくゝ之とめぬ由 いったれば雨おとろくしうふりまさくりてしとじに濡たれどせんすべなし するべの者をやとひてもと来し道へとかへるに いとくらきに坂路さかしてつまづきつゝたどるくゝ行 くるしき事いふばかりなし

雨くらき岩のかげ道こえかねて あふいきつかしいへもあらぬか

又ふる川のほとりにいてゝ右の方へとゆく からうじて寅の時さがり和哥の里につく ここかしこおこしてやどり求むれどなし やうくにして未だねざりける家のあるをたのミてやとれり いたくぬれにしかば 赤はだかになりて あぶりほす人もあり

十四日天氣よし 和哥の里をいでゝ辰時さがり かのふる川に至りてきのふ

の舟にのる 追手いとはやし 未時三名部の浦につく 若山より八十八里の  
海路なるに 早くも来にけることよくよろこびつゝ 舟よりあがりて家にか  
へるに 皆々待わびたる由く里かへしいふ 杣樹ハやかて別れてかへれり  
家人もおのれも互みに平かなる事をうれしみ思ふまゝ  
天つちの神のめぐみにまさきくて 吾はかへりぬおもかはりせず

## 志りかき

此日記をかくことくく かつはこしをれたる哥 とも冬野の草のいろ  
なきをも いかり猪みのかへりみずて かきしるせしは いとをこかましよう人  
に見せんとしわざにはあらて 大かたやどれる處々にて その日見きし  
をかたはしてしるして 哥も折にふれてよみ出し まゝにとめおきしなれは  
きの海のおきつ玉もの乱れあひ いづみなるしのだの森の楠のおち葉の見る  
めなく つの國のあしやの里のあしくよみひかめ はりまなるしかまに染る  
あなかちなるわざなるを きびの中山中々の人 わらべにもこそと思ひたゆ  
たひぬれど 細谷川のせまき心には さぬきの國の志渡のふる寺 しどけな  
しとて さすがにすてもえやらで とも浦にねばふ むろの木ねをはへて  
物せしは ながみの濱の長きよに いつくしまねのいつまでも つれくゝな  
らん折々の おのが心やりにとてなん 岩國山のあらしきその道あしく見過し  
いづもなるひの川水の心あさくて 古へより名高きあともさるべき所ゝを

もしらで過げんを 伯耆の國の大神山のみねにけのこる雪のはつくにのみと  
きききて 大方鳥取の里のとりもらしたる勝なるべく 但馬の國のきのさき  
の 清きいでゆの灯見し所 しの名もあまの橋立 はしたなきをみなはらは  
賤の男などにとひきゝしなれは 大江山のおほらかに棚引くもの おほゝ  
しくいひあやまり きゝあやまりたるもありぬべし はた所々の名の文字も  
都の大路のまほならず 賤の書たがへたるもありなんかし 多くうぢの川波  
うかりし よるくしがのからさきからきめみし折々 あはづのゝあはれな  
りし朝よりとよどの川水 みづからのみち見んしのびぐさにもとて かきあ  
つめおけるにこそ

天保十年あまりひとゝせ子の秋（二八四〇年）

きの國みなへ

熊代

繁里

本書は熊代繁里大人が廿三歳の時、即天保十一年四月十五日より六月十四日まで、(一八四〇年)大阪より播磨・備前・備中・讃岐・備後・安藝・周防・出雲・伯耆・因幡・但馬・丹後・丹波・京・近江・河内・和泉を旅行せし紀行文なるを、出立し処より紀州に係せる処、海路又紀州に入れる処 及び後書きを、大人自筆『安藝の早苗』より抄録す。

『安藝の早苗』は半紙半枚罫紙にて、一冊約五六十枚綴とし、五冊より成れり。(九五〇年)

昭和廿五年二月二十日

芝口 常楠

昭和廿四年一月十三日夜 芝口常楠氏より借りて写し終る

清水 長一郎

### 書写を終わって

この『安藝の早苗抄録』は和紙十七枚に、段落も区切りもなく毛筆で書写し、私では解読不明の処が多数あった。私が勝手に解釈しデジタル化したので、間違いはお許し願いたい。読み下し文を付け加える事も考慮したが、読者でお願いしたい。

丁度この『安藝の早苗』を書写して いる時、土生村の瀬戸理左衛門(如扇)が『安藝の早苗』より約八十年も前、(一七六一年)宝暦十一年から明和四年まで日本各地を旅行し、書き綴った日記『花扇子』(一七六七年)(美濃半紙二五五枚)を、御坊文化財研究会古文書解読会がテキストに使用する旨連絡があった。

平成二十一年(二〇〇九)年三月二十三日(月)

清水 章博